



ニュースリリース

2013年8月5日

山形国際ドキュメンタリー映画祭 2013

×

東北芸術工科大学

記者会見資料

●YIDFF 2013開催に向けた東北芸術工科大学との連携について

- ・山形国際ドキュメンタリー映画祭 2013 メインポスターデザイン発表
- ・山形国際ドキュメンタリー映画祭 2013
特集「やまがたと映画」プログラム内、「三都大学交流上映」について

●新着情報

- ・インターナショナル・コンペティション部門国際審査員発表

山形国際ドキュメンタリー映画祭 2013 開催に向けた 東北芸術工科大学との連携について

特定非営利活動法人山形国際ドキュメンタリー映画祭は、本祭開催に向けた取り組みの中で、東北芸術工科大学と様々な形で連携を取り合っています。学生のボランティア参加はもちろん、今回は映画祭の顔として広く開催を呼びかける開催告知ポスターのデザイン、プログラム内での学生作品の上映など、多岐に渡って東北芸術工科大学学生の力を活かした取り組みがなされています。

●東北芸術工科大学との連携

1. 【開催告知ポスター等、宣伝物のデザイン】

ポスターやスケジュールチラシ、チケット等、今回の開催告知に関する宣伝物のデザインは、東北芸術工科大学監修のもと、グラフィックデザイン学科の3年生68名の方々に取り組んでいただきました。この中からグラフィックデザイン学科教授陣によって選出された8点について、さらに映画祭事務局と当法人理事によって審査を重ね、3年生の安在絵理（あんざい えり）さんのデザインに決定いたしました。このデザインを使ったポスターを始めとする宣伝物が開催を知らせるものとして、国内海外合わせて2000通以上発送され、また山形県内各所に掲示されることとなります。

・安在絵理さんによるデザインコンセプト

ドキュメンタリー映画は、普段見ることのできない他人の目を通して記録された生活を、自分なりの感性や解釈で受け止めるものだと考え、「非日常の中の日常にスポットをあてる」というコンセプトでポスターを作成しました。モチーフに選んだのは、古民家の飾りガラスで、人の生活に身近に寄り添ってきたガラスは、数々の人間ドラマを知り、映し続けてきた所がドキュメンタリー映画に通じるものがあると思い選びました。ガラスの色を反転させることで、日常の中にある飾りガラスが特別な見え方になり、不思議なうねりだけが目立つようなデザインにしました。



2. 【特集プログラム「やまがたと映画」での大学交流上映】

◎三都大学交流上映

恒例の特集プログラム「やまがたと映画」において、これまで「やまがた映像の未来」として設けていた枠を拡大します。東北芸術工科大学とイタリアのミラノ大学、中国の中国美術学院の三つの大学で制作された作品の上映を通して、学生間の交流を行い、さらに意見交換や映像制作ワークショップを通して、新たな作品を生み出す原動力を、この山形から発信していこうという試みです。次世代を担うこれからの作家を支援する目的により開催するものです。

・東北芸術工科大学作品

2012年度卒業制作作品を中心に、現4年生、現3年生の作品等を上映します。また姉妹校である京都造形芸術大学の制作作品も加えての上映となります。

・ミラノ大学& DOCUCITY映画祭(※1) 作品

ミラノ大学の教師陣による作品上映と、イタリア・ミラノの映画祭DOCUCITYの上映作品を4作品上映します。また同大学のジャンマルコ・トーリ氏(※2)によるホーム・ムービーに関するワークショップも同時開催します。

※1

映像上映と講演の年間シリーズとして2006年にミラノ市でスタート。2010年からは、「DOCUCITY映画祭」として毎年5月に開催されることになった。教育的見地のもと、世界の様々な地域や文化圏から最先端のドキュメンタリーを入手して上映。また同時に、異文化交流研究の分野における、ドキュメンタリー映画の活用を推進している。この映画祭は主としてイタリアの映画作家を支援するためのものであり、現代の都市のあり方を示し、また疑問を投げかけることに焦点をあてながら、ノンフィクション映画における様々な可能性を映し出すことを主な目的としている。

※2

Associazione Home Movies (ホーム・ムービー協会) という、2002年に設立されたイタリア国立のアマチュア映像アーカイブの理事。この協会は、1920年代から80年代にかけてイタリアで作られた9.5mm、8mm、Super8、16mmのアマチュア映像を収集・保存しており、設立以来、映像アーカイブに関する国際会議や映画祭などの場で紹介されている。この協会の活動は、各種の映像を地理的な区分(市町村、県、地方)に従って収集したり、ホーム・ムービーを収集・分類するプロセスや、それらの映像を再利用したり上映したりする方法の検討に至るまで、多岐にわたっている。映画祭DOCUCITYとAssociazione Home Moviesは協働関係にあり、ミラノ大学ではホーム・ムービーに関する講演やセミナーを度々開催している。

・中国美術学院(杭州) 作品

教授陣による作品、大学院生による作品、そして学生ワークショップによって制作された作品を計16作品上映します。学生ワークショップの講師で、山形国際ドキュメンタリー映画祭 2007 アジア千波万波部門にて小川紳介賞を受賞した『乗愛(ピンアイ)』(日本公開タイトル『長江に生きる』)の監督・馮艶(フォン・イェン)さんがコーディネーターを務めます。

【開催概要】

名称： 山形国際ドキュメンタリー映画祭2013

会期： 10月10日（木）～17日（木） 8日間

会場： 山形市中央公民館（アズ七日町）、市民会館、フォーラム山形、山形美術館ほか

料金： 前売券 1回券1,000円、3枚つづり券2,500円、10枚つづり券6,000円

共通鑑賞券（公式カタログ引換券付き）：10,000円

当日券 1回券1,200円（60歳以上の方：1,000円）、3枚つづり券3,000円

10枚つづり券8,500円

共通鑑賞券（公式カタログ引換券付き）12,000円

※ 高校生以下無料（要・学生証提示）

前売引換券： 7月1日（月）より、チケットぴあ（Pコード：464-892）、セブン-イレブン、サークルK・サンクスにて発売中。

映画祭のプログラム：

インターナショナル・コンペティション

アジア千波万波

日本パノラマ（仮）

日本のドキュメンタリー作品の様々な試みを世界へ向けて紹介するプログラム。

作品上映と共にディスカッションとレクチャーを通して日本作品の深化を模索する。

未来の記憶のためにークリス・マルケルの旅と闘い

映画監督として幾多の傑作を送り出したクリス・マルケル（フランス、1921-2012）は、また写真、テキストからインターネット上の仮想空間まで、あらゆるメディアを使いこなし、制作をつづけた先駆的アーティストである。その広大な作品世界を体験する渾身のプログラム。

6つの眼差しと《倫理マシーン》

ドキュメンタリー作家は現実を相手に、「ある世界」ではない「この世界」を描く。どのカメラアングル、光の具合、ショットの切れ目を判断するにも、倫理的な仮題が立ちはだかっている。カメラは倫理を担う装置となる。本プログラムでは秀作の上映と活発なディスカッションを通して問題提起とする。東日本大震災の映像記録を巡るシンポジウムなども予定する。

それぞれの「アラブの春」

2011年、チュニジアで長期独裁政権を崩壊させ、周辺アラブ諸国に広がったいわゆる「アラブの春」。かつてない規模の反政府抗議活動とその余波をさまざまな視点で表現した作品を上映する。

ともにある Cinema with Us

2011年3月11日。東日本大震災、原発事故という未曾有の体験とそこから生まれ続ける課題を、改めて見つめ伝えていくプログラム。映画に何が出来るのかを問い、前回映画祭からスタートしたプロジェクトを継続する。

やまがたと映画

現代史を映し続けたヤマガタを、ドキュメンタリーによって再発見する。発掘映像による多角的な山形探検。ミラノ大学、中国美術学院、東北芸術工科大学の学生の作品交流などを通して、若い世代による映像の未来を映し出す取り組みを行う。

その他企画

【インターナショナル・コンペティション部門国際審査員発表】

●足立正生（映画監督：日本） Adachi Masao

1939年生まれ。日本大学芸術学部在学中、『鎖陰』（1963）で脚光を浴びる。若松孝二の独立プロダクションで前衛的なピンク映画の脚本を量産し、監督も。パレスチナで『赤軍-PFLP・世界戦争宣言』（1971）を撮影。1974年より日本を離れ、パレスチナ解放闘争に身を投じる。1997年にレバノンで逮捕され、3年の禁固刑ののち日本へ強制送還。2006年、赤軍メンバーの岡本公三をモデルにした映画『幽閉者 テロリスト』を発表。著作に『映画／革命』（2003）など。近年は欧米各地で特集上映が巡回されている。

●ラヴ・ディアズ（映画監督：フィリピン） Lav Diaz

1958年ミンダナオ島生まれ。監督作品は『Batang West Side』（2001）、『Evolution of a Filipino Family』（2005）、『Heremias, Book One』（2006）など。『Death in the Land of Encantos』（2007）はヴェネチア映画祭オリゾンティ部門のクロージングを飾り、金獅子賞スペシャル・メンションを受賞。『Melancholia』（2008）は同映画祭オリゾンティ部門グランプリを受賞。最新作『Norte, the End of History』（2013）はカンヌ映画祭ある視点部門で上映。フィリピンの社会的・政治的状況を映し出す作家として知られる。

●ジャン＝ピエール・リモザン（映画作家：フランス） Jean-Pierre Limosin

1983にアラン・ベルガラと共同監督した『Faux Fuyants』（カンヌ映画祭批評家週間）。アッバス・キアロスタミ、アラン・カヴァリエ、ダルデンヌ兄弟などのポートレート・ドキュメンタリーを作る。日本への関心は深く、武田真治と吉川ひなの主演の『Tokyo Eyes』、『北野武 神出鬼没』（YIDFF 2007で上映）などの映画を発表している。近年は『Novo』（2002）、『Carmen』（2005）、『Young Yakuza』（2007）がそれぞれロカルノ、ヴェネチア、カンヌ映画祭で初上映されている。

●ドロテー・ヴェナー（映像作家/キュレーター：ドイツ） Dorothee Wenner

ベルリン在住。ナイジェリアの映画産業ノリウッドを描いた『Peace Mission』（2008）や、ラゴスの小規模事業者がドイツへ初めて赴きビジネスチャンスを探る『DramaConsult』（2012）を監督。1990年よりベルリン映画祭フォーラム部門の選考委員を務め、ドバイ映画祭でもインドとサハラ以南のアフリカ地域を担当する。2006～2008はベルリン映画祭タレント・キャンパスのディレクターを務めた。キュレーターとしてもインド・アフリカ・ヨーロッパで映画や展覧会の企画を数多く手がけている。

●ほか一名

（名字アルファベット順）